

四ツ木遺跡

鳥栖市文化財調査報告書第98集

2022

鳥栖市教育委員会

四ツ木遺跡

鳥栖市文化財調査報告書第98集

2022

鳥栖市教育委員会

序 文

鳥栖市は、脊振山地の東端部にあります九千部山を最高所として、九州最大の河川である筑後川に面した緑と水豊かな内陸都市です。この地域は、古来より九州における交通の要衝として発展し、貴重な文化財が数多く存在する地域です。

本書は、国道3号線の道路拡幅工事に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した鳥栖市曾根崎町に所在する四ツ木遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査の結果、当遺跡より弥生時代前期から中期の溝確認されたほか、貴重な資料を多く得ることができました。

本書を通じて、地域の文化財に対して一層のご理解をいただき、また、学術・文化の向上に寄与するものとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、開発と文化財保護との調整にご理解とご協力いただいた佐賀国道事務所をはじめ、関係者の皆様、そして発掘作業、整理作業に従事された皆さまに厚く御礼を申し上げ序文といたします。

令和4年2月25日

鳥栖市教育委員会

教育長 天野 昌明

例 言

1. 本書は、国道3号線鳥栖拡幅事業に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した鳥栖市曾根崎町1347-1、1348-1に所在する四ツ木遺跡6区の調査報告書である。
2. 発掘調査は、令和2年5月11日から6月22日、整理報告は令和3年5月21日から令和4年2月25日まで鳥栖市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、九州地方整備局 佐賀国道事務所、佐賀県文化課ならびに地元方々の協力を得た。
4. 現地調査から報告書作成までの作業に従事したものは下記のとおりである。なお、出土遺物の整理を含む報告書作成業務は鳥栖市牛原町文化財整理室で実施した。
表土除去：株式会社酒井組
発掘作業：緒方幸弘、蒲原俊樹、高尾喜則、原田俊治、山口正樹
遺構写真：藤岡
空中写真：有限会社空中写真企画
遺物整理：加藤美砂、中島みち子、榎崎孝子、松崎友子、毛利よし子
遺物実測：加藤、中島、榎崎
製 図：加藤、中島、榎崎、松崎、毛利、藤岡
遺物写真：藤岡
5. 本書の執筆は、藤岡が行った。

凡 例

1. 本書で報告する調査地区は6区として調査を実施した。
2. 遺跡の略号は 四ツ木遺跡 (KYG) である。
K：基里地区 T：鳥栖地区 S：田代地区 A：旭地区 F：麓地区
3. 四ツ木遺跡で用いた遺構番号は3桁の一連番号とし、6区600番台とした。また、番号の頭には遺構の性格を示す分類略号を付して表示した。小穴についてはP01から一連番号を付した。
4. 遺構の種別を表す分類略号は次のとおりである。
SD：溝、SK：土壇、P：小穴
5. 遺構図に用いた方位は座標北である。座標は国土座標第Ⅱ系を用いた。
6. 測定値の表示に用いた単位は遺構m、遺物cmを原則とした。
7. 表で示した計測値のうち、() は復元値・推定値、〈 〉 は残存値を示す。
8. 出土遺物のうち、本書に掲載したものは21001番から一連番号をつけ、管理している。
9. 出土遺物、遺構・遺物図面および写真は鳥栖市牛原町文化財整理室に保管している。

本文目次

第1章 調査の概要	1
I. 調査に至る経緯	
II. 調査の組織	
III. 調査の経過	
第2章 地理的・歴史的環境	2
I. 地理的環境	
II. 歴史的環境	
第3章 調査の内容	4
第4章 四ツ木遺跡6区の調査	4
第5章 まとめ	11
報告書抄録	

挿図目次

図1 遺跡周辺図(1/25,000)	3
図2 調査区配置図(1/2,500)	3
図3 6区調査区全体図(1/100)	5
図4 SD601・SK602(1/60)	6
図5 SD出土土器①(1/3)	7
図6 SD出土土器②(1/3)	8
図7 SD出土土器③(1/3)	9
図8 SD出土石器(1/3)	10
図9 周辺調査状況図(1/5,000)	12

表目次

表1 四ツ木遺跡6区出土遺物	13
----------------	----

写真図版目次

写真図版1	1 四ツ木遺跡6区全景(南から)
	2 四ツ木遺跡6区全景(上空から)
写真図版2	1 四ツ木遺跡6区全景(北東から)
	2 SD601全景(南から)
	3 SD601・SK602B-B'土層(北から)
	4 SD601A-A'土層(南から)
写真図版3～5	SD出土遺物

第1章 調査の概要

I. 調査に至る経緯

平成29年9月22日付で佐賀国道事務所より、国道3号線鳥栖拡幅事業に先立ち埋蔵文化財発掘調査依頼、発掘届が提出された。これを受けて調査依頼のあった鳥栖市曾根崎町1347-1、1348-1、1350-2、1489-7、1499-2、1533-2、1537-1の8地点において、平成29年10月25日に確認調査を行い、2地点で遺構を確認した。事業者と協議を行い、遺構が確認された144㎡について、本調査を実施することで合意した。

本調査は、令和2年5月1日付で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、5月11日から調査に着手した。現地での発掘調査は6月22日に完了した。なお、整理作業は令和3年5月20日から着手した。

II. 調査の組織

鳥栖市教育委員会が主体となって実施した。組織は以下のとおり。

【令和2・令和3年度】

調査主体 鳥栖市教育委員会

総括 教 育 長 天野昌明

教 育 部 長 白水隆弘（令和2年11月～令和3年3月）

小柳秀和（令和3年4月～）

教 育 次 長 白水隆弘（～令和2年10月）

教 育 部 次 長 青木博美（令和2年11月～）

生涯学習課長 松隈義和

生涯学習課参事 竹下 徹

生涯学習課課長補佐 八尋茂子（～令和3年3月）

久山高史（令和3年4月～）

調 査 生涯学習課文化財係

文 化 財 係 長 久山高史（～令和3年3月）

島 孝寿（令和3年4月～）

文 化 財 係 主 査 湯浅満暢（事前審査・確認調査担当）

文 化 財 係 主 事 藤岡怜史（本調査担当）

III. 調査の経過

四ツ木遺跡6区は、令和2年5月11日より重機による表土剥ぎを開始。6月21日まで掘削作業を行い、同日空中写真を撮影した。6月22日に埋戻しを完了し、23日に現地引き渡しを行った。

第2章 地理的・歴史的環境

I. 地理的環境

鳥栖市は、佐賀県東端部に位置し、北は基山町、福岡県那珂川市、東は小郡市、南は久留米市と県境を接する。市域は南北約9 km、東西約8 kmに広がり、面積は71.72 km²を計る。市の北部には、脊振連山最東端にそびえる九千部山（標高848m）を主峰とした山々が南東に向かって裾野を広げ、東に杓子ヶ峰（標高312m）、西に城山（標高494m）、石谷山（標高754m）、雲野尾峠（400m）が続く。市域を流れる河川は山麓部に源を発し、西から沼川、安良川、大木川、秋光川が南流して筑後川へと注ぐ。これらの山麓から南へと丘陵が枝葉状にのび、この間には多くの谷が形成され、丘陵先端付近には現在の市街地が広がる。大木川左岸一帯と沼川流域一帯には洪積層が発達し、市街地の南には洪積平野が広がる。群石山麓下で大木川は神辺扇状地、安良川は養父扇状地を形成する。

II. 歴史的環境

市内には、既に湮滅したものを含め、旧石器時代以降の約190の遺跡が確認されている。

旧石器時代では、長ノ原遺跡・平原遺跡・本川原遺跡・牛原原田遺跡・本行遺跡でナイフ形石器や尖頭器、台形石器、角錐状石器が採集されているが、明確な遺構は検出されていない。

縄文時代では、今町共同山遺跡で草創期～早期の刺突文土器、西田遺跡で多数の集石遺構とともに早期の押型文土器、牛原前田遺跡で前期の曾畑式土器が出土している。平原遺跡では集石遺構40基とともに中期の並木式土器が出土している。蔵上遺跡では土器棺墓41基・住居跡10軒とともに土偶や十文字型石器などが大量に出土しており、後期の拠点集落とみられる。村田三本松遺跡で晩期の甕棺墓が検出されている。

弥生時代では、前期までは高位～中位段丘で営まれた集落は、中期中頃までには低位段丘に広がり、後期には低位段丘に環濠集落が形成されるようになる。特に、青銅器鋳型が出土した安永田遺跡・藤木遺跡・本行遺跡、赤漆玉鉤装鞘銅剣を含む7本の銅剣等を副葬する墓地群と祖霊祭祀とみられる大型建物跡や祭祀土坑が検出された。柚比本村遺跡は注目すべき遺跡として挙げられる。

古墳時代には、山麓部や高位段丘上に古墳が築造されるようになる。特に6世紀代には剣塚・庚申堂塚・岡寺古墳などの大型前方後円墳や田代太田古墳・ヒャーガンサン古墳などの装飾古墳が築造された。また平原遺跡・大久保遺跡・元古賀遺跡などで大規模集落が形成される。

中世では、多くの館跡や町屋跡を確認しているが、特に勝尾城筑紫氏遺跡は、広大な敷地とともに城及び館跡が良好な状態で残っている。

近世以降、基肄郡と養父郡の東半分は対馬藩領に、養父西半は佐賀藩領となる。また長崎街道が整備されるとともに両藩領域にはそれぞれ田代宿、轟木宿が設けられた。田代宿には対馬藩田代領1万3千余石の統治機関として代官所が設置され、轟木宿では佐賀藩の番所が設置されていた。明治時代になると巖原県・伊万里県・三潁県・長崎県を経て明治16年に佐賀県となった。昭和29年には、鳥栖町・田代町・基里村・麓村・旭村の5町村が合併し、鳥栖市として今日に至っている。

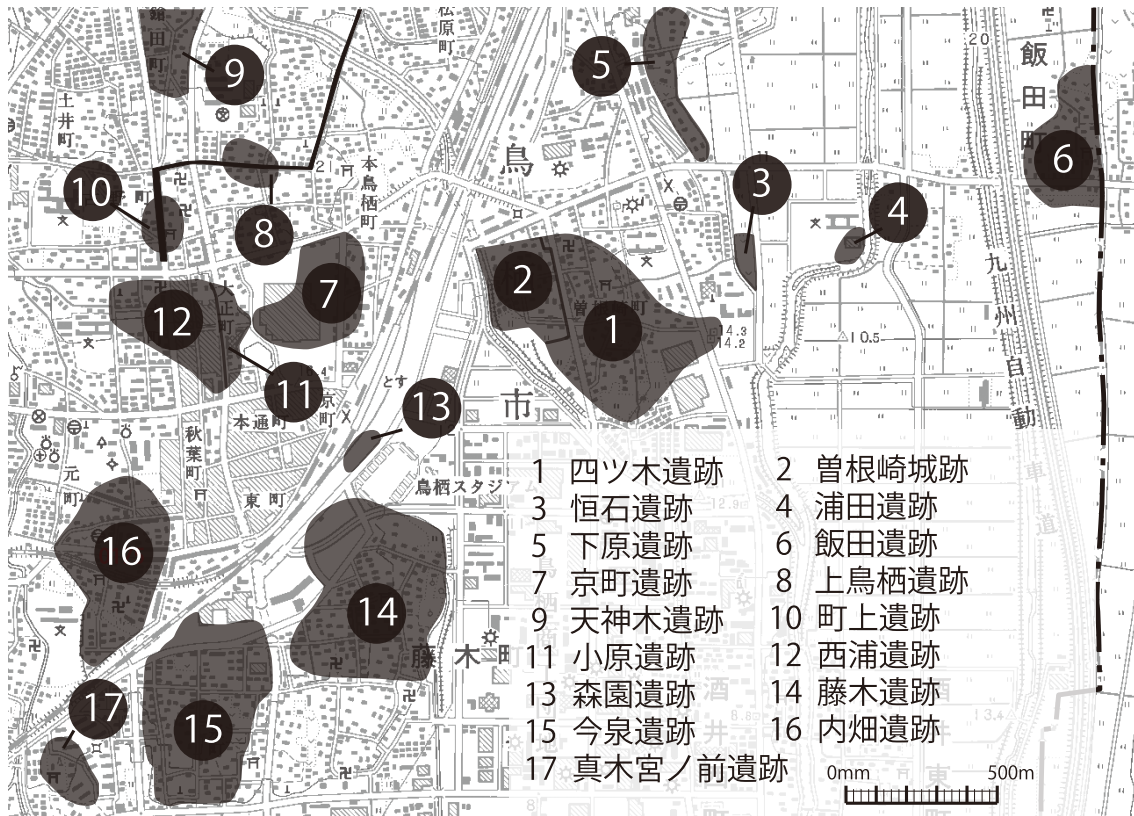


図1 遺跡周辺地図 (1/25,000)

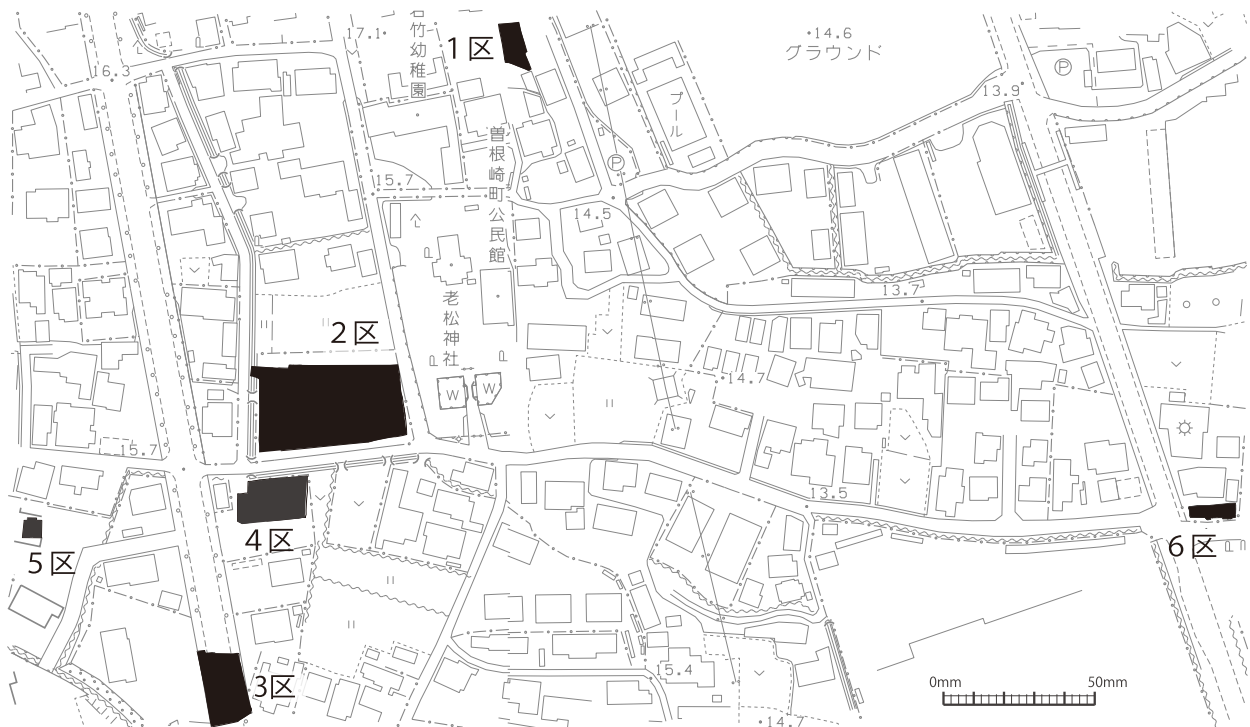


図2 調査区配置図 (1/2,500)

第3章 調査の内容

遺跡の概要

四ツ木遺跡は、九千部山（848m）の南から城山（501m）・群石山（201m）に至る支嶺の間の断層線に沿って流れる大木川左岸地区の中位段丘上に立地し、標高は概ね15mである。本遺跡は平成6年の1次調査（1区）以降5回の本調査が行われており、弥生時代・古代～中近世の遺構が確認されている。弥生時代については円形住居、溝などが確認されているが、遺跡の中心を成しているものは中世の集落跡である。文献等から地頭職曾根崎氏関連の遺跡であると推定されている。

本調査対象地は四ツ木遺跡東端に位置し、標高は約13mである。調査以前は宅地として土地利用されていた。

調査の結果、溝1条、土坑1基、小穴6基を検出した。36リットルコンテナ3箱分の遺物が出土したが、その多くは溝遺構に伴うものである。調査区内には3m四方の攪乱3か所の他、井戸と推測される円筒状の攪乱2基なども確認された。調査区南東には東西2m、南北の検出長1mの方形プランが確認されたが、出土品、土層断面状況から近代の開発に伴うものと判断した。調査区の地形は西から東に向かって緩やかに下がる。

第4章 四ツ木遺跡6区の調査

SD601（図4 図版2-2～4）

調査区西部にて検出された。調査区の北西から南東に向かって直線状に伸びる。長さ約8mを検出した。調査区南側の確認調査の際、その続きが確認されており、南東に伸びていることが分かっている。北端も同様に調査区外に伸びると考えられる。幅1.5～2m、深さは0.5～0.7mを測る。断面形状は逆台形を呈しており、底部の幅は平均0.3mである。溝の埋土は1～5層に大分した。B-B'断面の堆積状況から、溝の西からの土砂が堆積した状況がみてとれる。A-A'断面では5層のみが残る。SK602と重複関係にあり、SD601が新しい。出土した遺物は36リットルコンテナ2箱分である。中には多くの黒曜石片が含まれているが、製品は確認されなかった。出土した土器は、弥生時代前期の特徴をもつものが多く出土している。埋没年代は弥生時代前期～中期と考えられる。

出土土器（図5～7 図版3・4-1～12）

出土した遺物は甕・壺・鉢・高坏などである。図5-1～11と図6-1～5は甕である。図5-1・2と4～6の口縁部に刻みが、図5-3は口縁部と突帯に刻みがみられる。図6-6～9は甕か壺と推測される。図6-7は口縁部に刻みがみられる。図6-10～図7-2を鉢とした。図6-10は突帯に、図6-11・13と図7-1・2は口縁部に刻みがみられる。図7-3と4は高坏である。

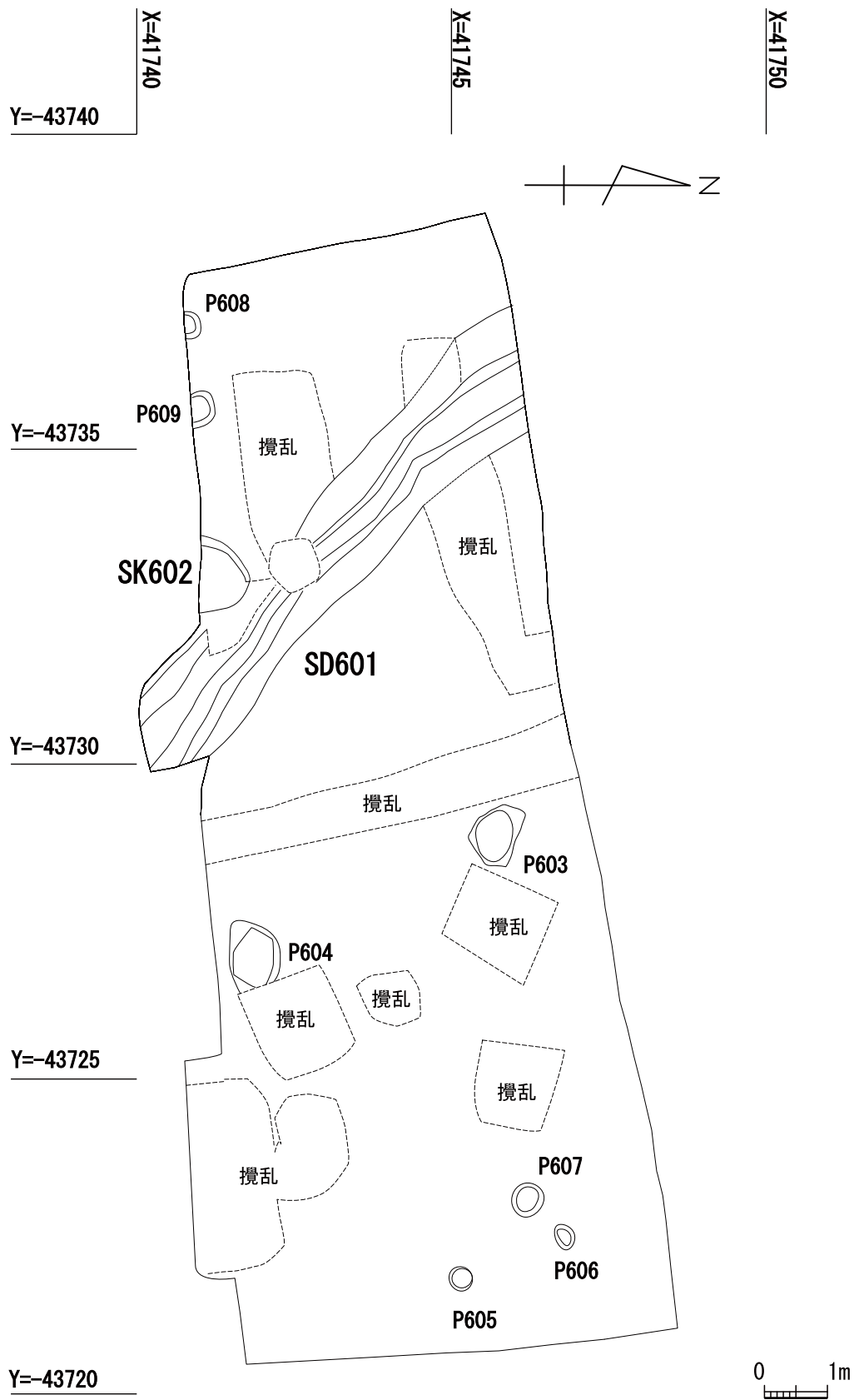
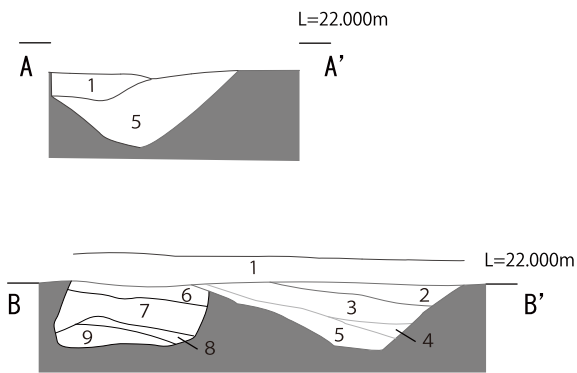
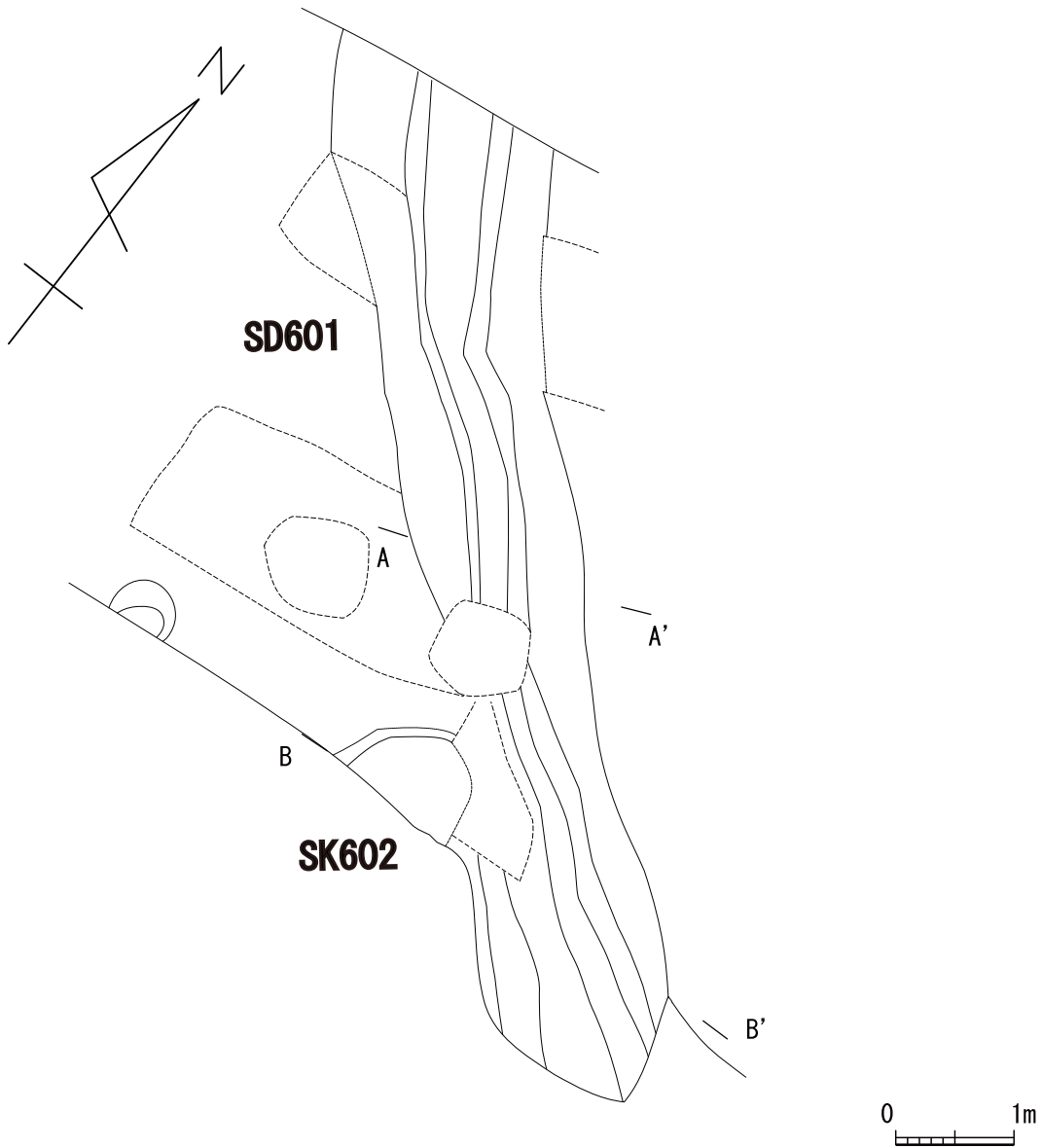


図3 6区調査区全体図 (1/100)



1. 表土・攪乱土
2. 黒褐色粘質土
3. 黒色土
4. 褐色粘質土
5. 暗褐色砂質土
6. 黒褐色土(黄褐色土を多く含む)
7. 黒褐色砂質土
8. 暗褐色砂質土
9. 黒褐色粘質

図4 SD601・SK602 (1/60)

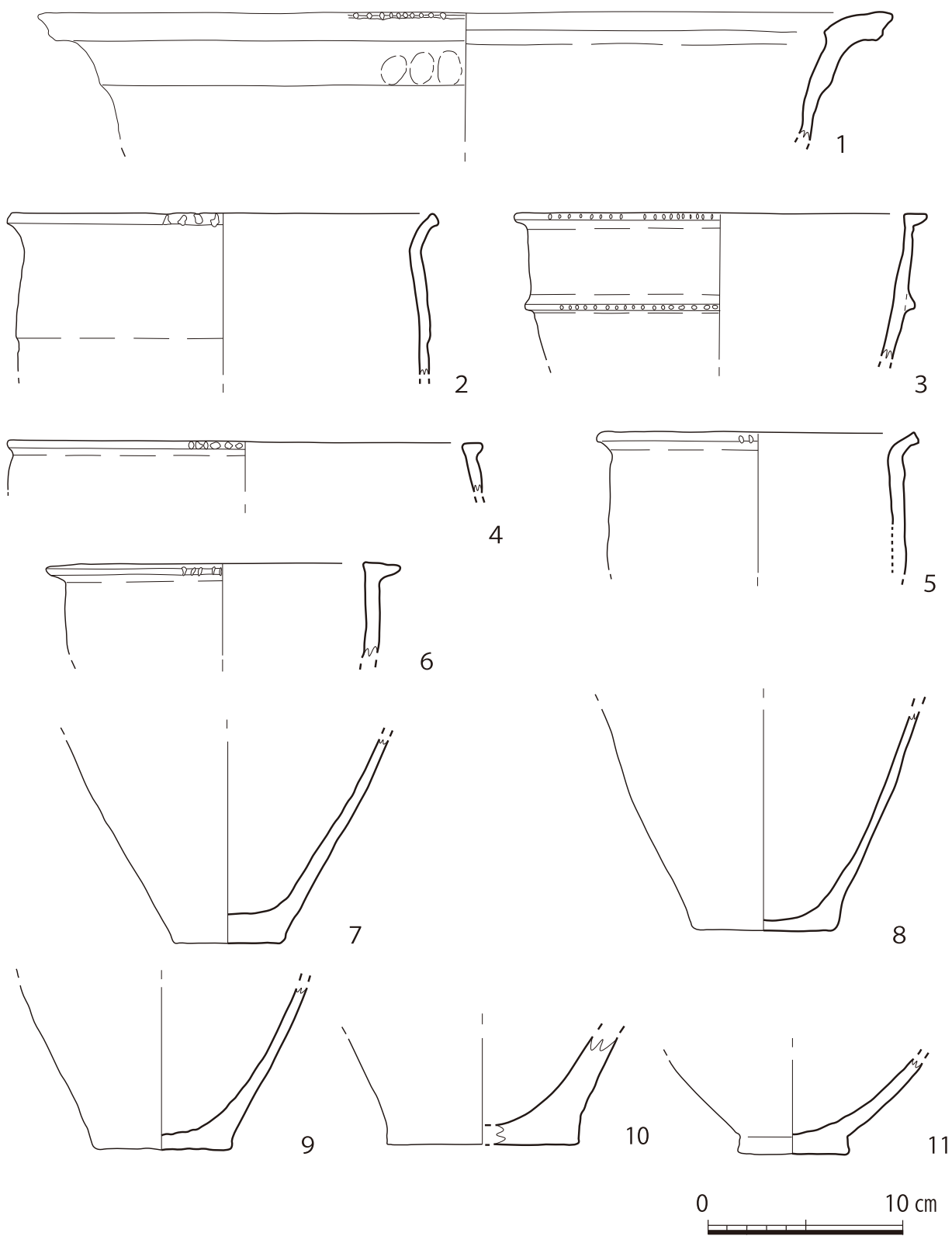


图5 SD出土土器①(1/3)

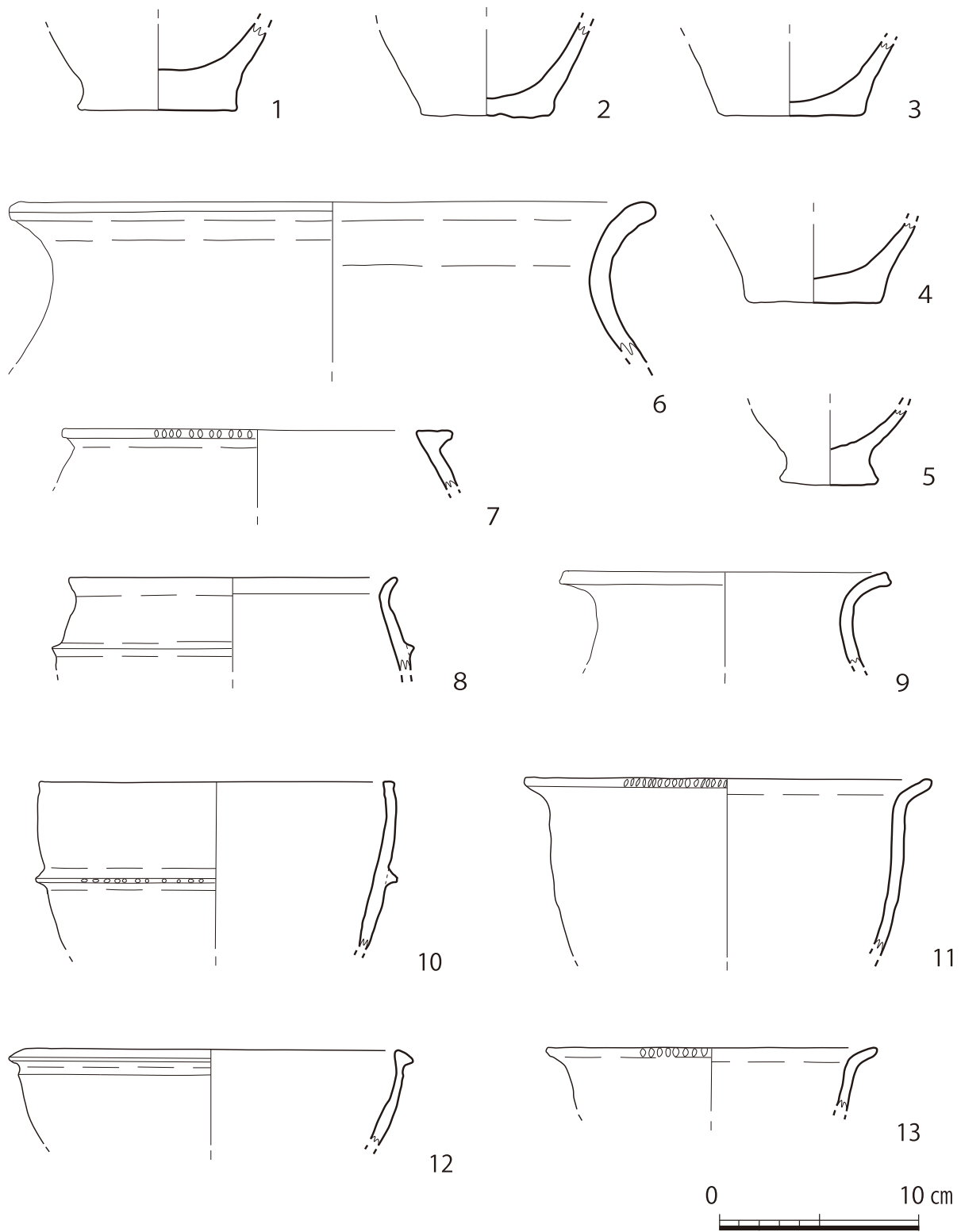


图6 SD 出土土器② (1/3)

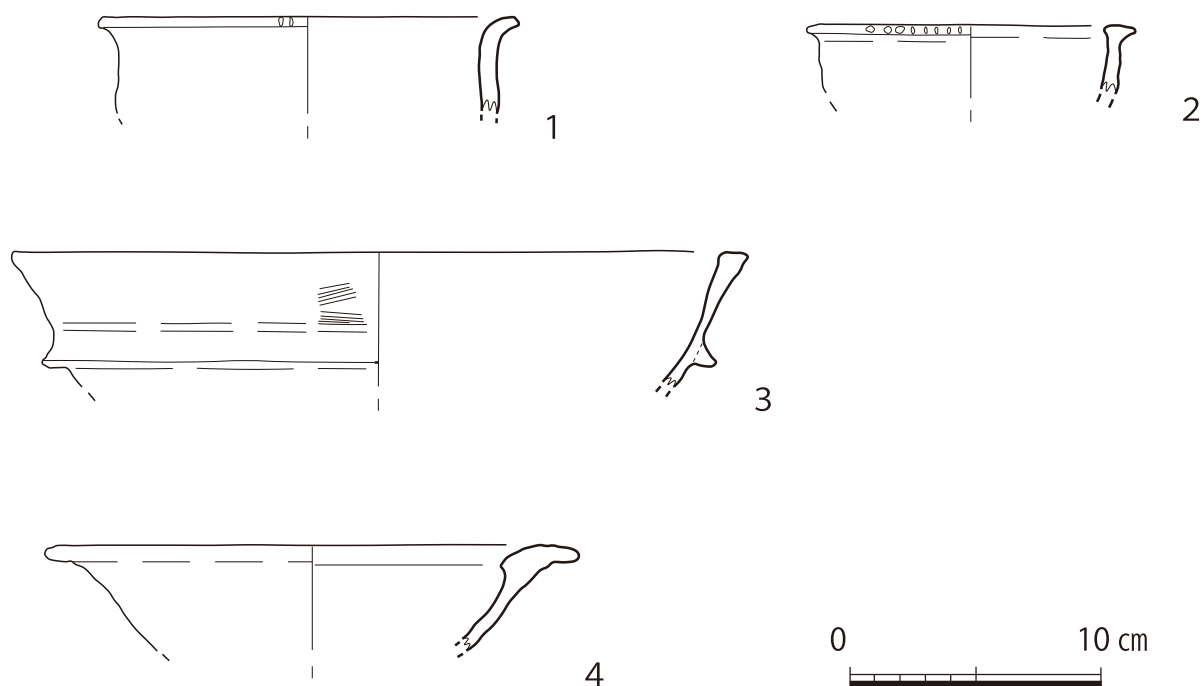


図7 SD出土土器③（1/3）

SK602（図4 図版2-3）

調査区南端にて検出された。攪乱による削平と調査区外へと延び全容は不明だが、平面プランは円形と推測される。確認長は長軸 1.3m、短軸 1.1m、検出面からの最大深度 0.4mを測る。調査区南端の土層断面状況から SD601 と重複関係は SD601 が新しい。埋土は4層に分かれており、全体的に砂質土が堆積している。断面形状はフラスコ状を呈しており、確認できた下端は上端に比べて 0.2 m程オーバーハングする。逆茂木痕跡は確認されず、形態から貯蔵穴と推測される。出土遺物は非常に少なく図化に耐えうるものは確認できなかったが、時期については SD601 との重複関係から弥生前期以前と考えられる。

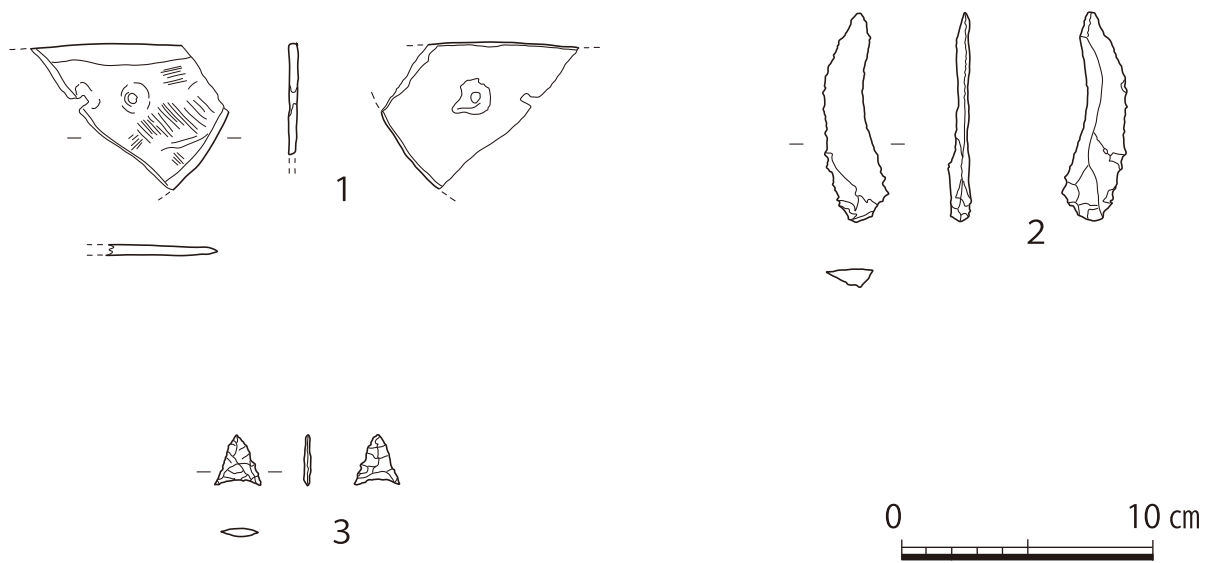


図8 SD 出土石器（1/3）

SD 出土石器（図8 図版4-13~15）

SD601 から黒曜石の小片が多く出土したが、前述のとおり製品は確認できなかった。1 は頁岩質砂岩製の石包丁である。破損のため全容は不明だが、外湾刃半月型とみられる。紐孔は両面から敲打とみられる。断面は薄く直線的で刃部は両刃に研ぎだされたものとみられる。2 は安山岩製石刃。3 は安山岩製の無茎石鏃である。

第5章 まとめ

四ツ木遺跡6区では、弥生時代前期の遺構を確認した。当該期の集落様相について、周辺の発掘調査をもとに検討する。

遺跡の性格

四ツ木遺跡ではこれまでの調査で弥生～中・近世の遺構が確認されている。今回調査では弥生時代前期～中期の溝(SD601)を検出した。環濠と推測される。周辺では西に400m程離れた3区調査にて、平成11年に弥生時代後期の溝、弥生時代中期の円形住居跡が確認されている。溝は検出長15m、幅3～4m、深度0.4～0.6mを測り、断面形状は逆台形を呈している。しかし、本調査地点との位置関係、時期の違いから、現段階では同一の遺構である可能性は低いと考えられる。

市内ではこれまで四ツ木遺跡に近接する藤木遺跡をはじめ7か所で環濠が確認された。中でも八ツ並金丸遺跡・幸津遺跡にて確認された環濠は弥生時代前期から中期のものとする。この2つの環濠は性格が大きく異なり、八ツ並金丸遺跡で確認された環濠は内径面積430㎡と小型のもの、幸津遺跡で確認されたものは推定される内径面積は14,500㎡と大型のものである。今回確認されたSD601は検出状況から後者の大型のものと考えられる。八ツ並金丸遺跡では環濠の内外に同時期の貯蔵穴が確認されており、SK602についてSD602と同時期である可能性はある。四ツ木遺跡全体を通してこれまで弥生時代前期の竪穴住居跡は確認されておらず、集落の様相、規模は不明である。今後の調査の進展に期待したい。

参考文献

- 『柚比遺跡群3』佐賀県文化財報告書第155集 2003 佐賀県教育委員会
- 『幸津遺跡』佐賀県文化財調査報告書第169集 2007 佐賀県教育委員会
- 『四ツ木遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第79集 2007 鳥栖市教育委員会
- 『鳥栖市文化財年報1999』2008 鳥栖市教育委員会
- 『藤木遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第84集 2015 鳥栖市教育委員会
- 『鳥栖市誌』第2巻 原始・古代編 2005 鳥栖市教育委員会
- 『姫方遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第86集 2016 鳥栖市教育委員会

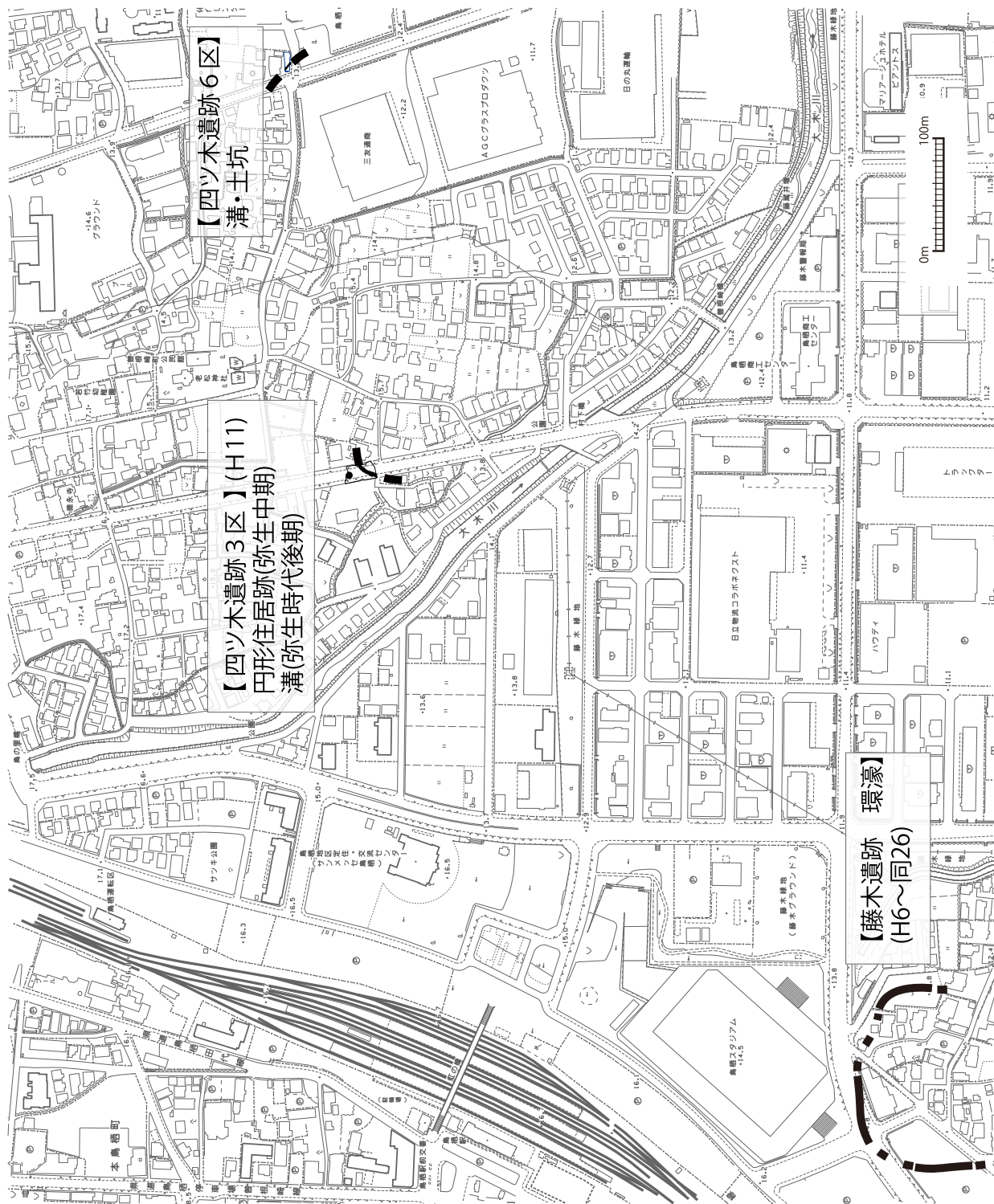
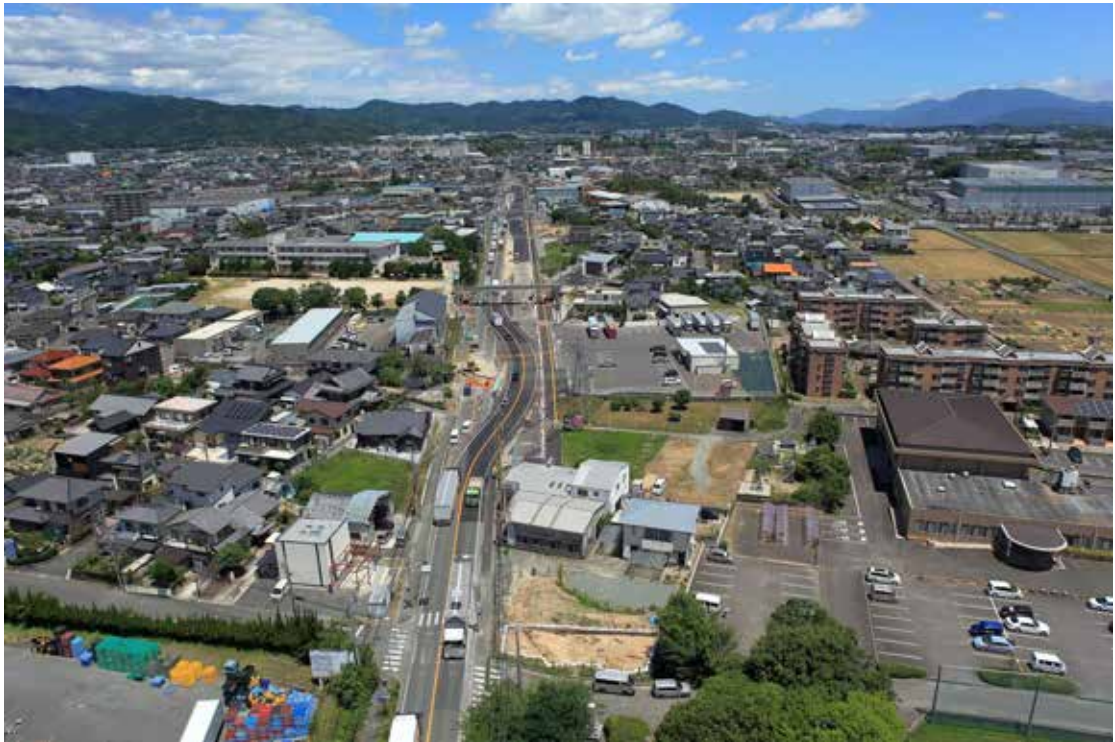


図9 周辺調査状況 (1/5,000)

表1 四ツ木遺跡6区出土遺物

法量の単位はcm ()は復元値 < >は残存値

図番号	遺構	器種	法量			色調		調整	備考	登録番号
			口径	器高	底径	外面	内面			
図5-1	SD601	甕	(47.5)	<7.1>	—	浅黄橙色	浅黄褐色	外面：ナデ ユビオサエ 内面：ナデ	口縁部に刻み	210001
図5-2	SD601	甕	(24.0)	<8.0>	—	浅黄色	浅黄色	外面：ナデ ハケ 内面：ナデ	口縁部に刻み	210002
図5-3	SD601	甕	(23.0)	<8.1>	—	暗褐色	褐色	外面：ナデ 内面：ナデ	口縁部と突帯に刻み	210003
図5-4	SD601	甕	(26.4)	<2.8>	—	にぶい橙	にぶい橙	外面：ナデ 内面：ナデ	口縁部に刻み	210004
図5-5	SD601	甕	(18.0)	<7.9>	—	にぶい橙色	にぶい褐色	外面：ナデ 内面：ナデ	口縁部に刻み	210005
図5-6	SD601	甕	(14.8)	<3.9>	—	橙色	橙色	外面：ナデ 内面：ナデ		210006
図5-7	SD601	甕	—	<11.3>	6.2	にぶい橙色	灰褐色	外面：ナデ 内面：ナデ		210007
図5-8	SD601	甕	—	<12.2>	7.9	にぶい黄橙色	灰褐色	外面：不明 内面：ナデ		210008
図5-9	SD601	甕	—	<9.0>	7.6	にぶい褐色	にぶい橙色	外面：不明 内面：不明		210009
図5-10	SD601	甕	—	<4.4>	(8.0)	にぶい黄橙色	橙色	外面：ナデ 内面：ナデ		210010
図5-11	SD601	甕	—	<5.4>	6.2	黄褐色	にぶい黄褐色	外面：ナデ 内面：不明		210011
図6-1	SD601	甕	—	<4.8>	<8.6>	浅黄色	浅黄色	外面：ナデ 内面：ナデ		210012
図6-2	SD601	甕	—	<5.2>	7.0	橙色	黒褐色	外面：ナデ 内面：ナデ		210013
図6-3	SD601	甕	—	<4.4>	7.4	にぶい橙色	にぶい黄褐色	外面：ナデ 内面：ナデ		210014
図6-4	SD601	甕	—	<4.0>	8.0	にぶい橙色	にぶい黄褐色	外面：ナデ 内面：ナデ		210015
図6-5	SD601	甕	—	<4.1>	5.2	橙色	橙色	外面：ナデ 内面：不明		210016
図6-6	SD601	壺?	(35.2)	<8.8>	—	明黄褐色	明黄褐色	外面：ナデ 内面：ナデ		210017
図6-7	SD601	壺?	(21.2)	<3.2>	—	にぶい橙	にぶい黄褐色	外面：ナデ 内面：ナデ	口縁部に刻み	210018
図6-8	SD601	甕	(17.8)	<5.1>	—	橙色	橙色	外面：ナデ 内面：ナデ		210019
図6-9	SD601	壺?	(18.0)	<5.2>	—	にぶい黄褐色		外面：ナデ 内面：ナデ		210020
図6-10	SD601	鉢	(19.2)	<9.1>	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面：ナデ 内面：ナデ		210021
図6-11	SD601	鉢	(22.2)	<9.7>	—	にぶい褐色	にぶい赤褐色	外面：ナデ 内面：ナデ	口縁部に刻み	210022
図6-12	SD601	鉢?	(22.0)	<5.2>	—	橙色	褐灰色	外面：ナデ 内面：ナデ		210023
図6-13	SD601	鉢	(18.0)	<3.4>	—	にぶい褐色	にぶい橙	外面：ナデ 内面：ナデ	口縁部に刻み	210024
図7-1	SD601	鉢	(17.0)	<4.0>	—	にぶい橙	にぶい橙	外面：ナデ 内面：ナデ	口縁部に刻み	210025
図7-2	SD601	鉢	(13.6)	<2.8>	—	橙色	浅黄褐色	外面：ナデ 内面：ナデ	口縁部に刻み	210026
図7-3	SD601	高坏	(30.4)	<5.6>	—	褐灰色	灰褐色	外面：横ナデ 内面：ナデ	後期後半	210027
図7-4	SD601	高坏	(22.0)	<4.4>	—	浅黄褐色	浅黄褐色	外面：不明 内面：不明	後期中頃	210028
図8-1	SD601	石器	縦<5.6>	横<7.5>	厚0.3			石包丁	頁岩	210029
図8-2	SD601	石器	縦<8.0>	横2.4	厚0.7			石刃	安山岩	210030
図8-3	SD601	石器	縦1.9	横1.7	厚0.25			石鏃	安山岩	210031



四ツ木遺跡 6区全景（南から）



四ツ木遺跡 6区全景（上空から）

図版 2



四ツ木遺跡6区全景（北東から）



SD601 全景（南から）



SD601・SK602B-B'土層（北から）



SD601A-A'土層（南から）



图 5 - 1



图 5 - 2



图 5 - 3



图 5 - 4



图 5 - 5



图 5 - 7



图 5 - 8



图 5 - 9



图 5 - 10



图 5 - 11



图 6 - 1



图 6 - 2



图 6 - 3



图 6 - 4



图 6 - 5



图 6-6



图 6-7



图 6-8



图 6-9



图 6-10



图 6-11



图 6-12



图 6-13



图 7-1



图 7-2



图 7-3



图 7-4



图 8-1



图 8-2



图 8-3

報告書抄録

ふりがな	よつぎいせき 6く
書名	四ツ木遺跡 6区
副書名	
巻次	
シリーズ名	鳥栖市文化財調査報告書
シリーズ番号	第98集
編著者名	藤岡怜史
編集機関	鳥栖市教育委員会
所在地	〒841-8511 佐賀県鳥栖市宿町1118番地 Tel.0942 (85) 3695
発行年月日	西暦2022年2月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よつぎいせき 四ツ木遺跡 (6区)	さがけんとし 佐賀県鳥栖市 そねざきまち 曾根崎町	410213	—	33° 37' 55"	130° 53' 00"	20200511 ~ 20200622	144 m ²	国道拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
四ツ木遺跡 (6区)	集落跡	弥生時代	溝 土坑	弥生土器 石器	

四ツ木遺跡

鳥栖市文化財調査報告書第 98 集
2022 年（令和 4 年）2 月 25 日

発行 鳥栖市教育委員会
鳥栖市宿町 1118 番地
印刷 株式会社 クキナミ
佐賀県鳥栖市古賀町 322

